One & Only

歯科医療の本質的価値を探る

中原 悦夫
東京都・協立歯科クリニークデュボワ

歯科医療の時間の概念とシンクロニシティ

近代歯科医学を語るうえで、科学的ではないこと、医学的ではないこと、あるいは論理的に説明できないことを語るのはとかく嫌厭されがちです。哲学的なことも然りで、ましてや宗教的なことに触れると、むしろ「倦厭される」としたほうが本質的な表現かもしれません。

西洋において、科学あるいは医学は物心二元論と要素還元主義に基づいた論文の蓄積によって発展してきた実績があり、私たちの生活にその恩恵が大いにもたらされてきました。しかし、西洋社会の生い立ちにはキリスト教との深いかかわりが常に存在するように、近代科学や近代医学が急速に花開いた背景にもキリスト教を抜きには語れません。

端的にいえば、中世におけるプロテスタンティズムによって、宇宙万物は神が創造したのであるから、神の作品である宇宙の中には神はいないという解釈を可能にし、宇宙に存在するものを細かくばらして分析したり（要素還元主義）、あるいは死体を切り刻んで解剖したり（物心二元論）しても直接神に触れているわけではないので問題ないとされたことから、急速に科学や医学が発展してきたわけです。当時の科学者たちには聖書に反した科学的実証をすると常にカソリックの断罪が待ち受けていたわけですから、いかに宗教から切り離すかという科学の歴史を考えると、「倦厭」のほうが妥当であると思われてなりません。

というわけで、**科学や医学も宗教と深くかかわって存在している**わけですから、嫌厭されることを恐れず、シンクロニシティと歯科医療のかかわりについて考えてみたいと思います。

ユングのシンクロニシティ

「シンクロニシティ（共時性）」とは、深層心理学者のカール・グスタフ・ユングによって提唱された、「因果性」とは異なる原理としての**「意味のある偶然の一致」**を表す概念です。

筆者の体験でいえば、「ある学会の分科会に招待されたアロマテラピストの講演内容をチラシで読んで、是非この人の話を聞きたいと思って日程を見ると、どうしても外せない用事と重なっていて、その講演会に行けなかった。その講演会の１週間後、全く関係のないパーティーの席で、友人に紹介され、その人

と話していくうちに、聞きたかった講演の演者本人であることがわかった」とか、「面白い学校を作ろうとしている元気な女性がいるので、みんなで集まってその女性の話を聞こうという会があり、出向いていく予定であった。しかし、当日急患の処置が長引いてしまい、その会には出席できなかった。その10日後、軽井沢の友人宅で紹介された方が、まさにその学校を作ろうとしている女性であった」といったことがあります。あるいは、「20年ぶりにあるテレビドラマに見入っていた。最初は目にも留めていない脇役の無名女優のことが、最終回の一つ前になって急に気になり出した。ネットで調べてその女優の名前を知り、気になった理由はわからなかったが、姿勢が気になったことだけは記憶していた。最終回を見終わった翌々日、ある矯正の先生から珍しく電話があり、東京で継続して治療をお願いしたい患者がいるのでと、その女優の名前が出た」というような経験です。しかも２ヵ月くらいのうちにこれら３つの体験をするとなると、**偶然というより、何らかの意味をもっている**と誰しも思いたくなるものです。

ユングは、このような**「偶然の一致」は偶然ではなく、非因果的な複数の事象の同時発生か、普遍的な事象を作り出す力の連続性による**と考えました。そして、**集合的無意識によって、直感的な意識と行動が調和した人間の意識のコミュニケーションをとおして、現実の出来事が形成される**と分析しました。それ故、シンクロニシティは、それが起きることで意味を生成していると捉えられるのです。ちなみに、集合性とは、我々人間が皆、無意識の深い部分で共有している、歴史的、社会的、生物的部分をさしています。

また、ユングはノーベル物理学受賞者のパウリの影響を受け、シンクロニシティの傍証として取り上げたのが占星術であり、晩年はUFOとの遭遇体験も集合的無意識の投影であるとする著書『空飛ぶ円盤』を出版し、広く超常現象をも研究対象にしたことからわかるように、心的全体性の回復を試みています。

時間の感覚

人間が作り出した変化を認識するための基準となる時間の概念は、人間を作り出した地球の太陽系における周期性に沿って古代よりさまざまな方式が考案され、現在の基準へと世界的に統一されるに至っています。従って、現代人は同じ基準による時間概念を共有して生活しているわけです。時間の概念は、芸術、哲学、自然科学、心理学など常に重要なテーマになります。

現在のこの瞬間を１秒でも過ぎれば過去ができ上がり、ほんの１秒手前は未来なのです。しかし、人のもつ時間の基準は統一されているにもかかわらず、その時間の感覚は実は人それぞれです。年齢を重ねれば重ねるほど、１日なり、１年が過ぎるのが早くなっているという感覚を多くの人が感じているのではないでしょうか。これについて「人は時間をそれまで生きてきた経験の量の比率で感じ取っている」という説があり、６歳の子どもの１年は人生の1/6ですが、60歳の成人の１年は1/60であるとされています。経験の大きさによってもその感覚は違うかもしれませんが、つまり**年齢によっても時間の感覚は違う**と理解しておく必要がありそうです。

聖路加国際病院理事長の日野原重明先生は子どもたちに、**「“命”とは“人が生きた時間”」**と説明しています。命を大切にすることは、時間を大切にすることになります。また、あるビジネスマンは、「僕の１時間の稼ぎを理解しているかね」と言って自分を待たすとどれだけ損害が出るかという理屈を展開します。こういう御仁には、寝ている時間を入れて計算したくなりますが、日野原先生の説明から、**「患者の一番大切なものは時間」**という結論を導き出すことができます。

待合室で待っている患者の時間の感覚もお年寄りと子どもでは違うし、多忙極めるビジネスマンと子育てを終えて時間をもて余している専業主婦とは当然違いが出てくるでしょう。何よりも、個人にもち合わせた気性というか性格によって大きく左右されるのが一番大きいと思われます。

一方、診療室で仕事をしている我々の時間の感覚は、年齢や性格によっても違いはあるでしょうが、やはり時間に追われて仕事をこなしているなかでの時間の感覚は本当に短く感じてしまうものです。

ですから、私たち歯科医師は、**処置中の１分の時間感覚は待合室で待機中の患者の10分に相当すると心得ておくべき**です。

臨床で感じるシンクロニシティ

オーケストラの指揮者の指揮棒一振りで曲の演奏が始まるとき、100余名の演奏者の弾き始めはその棒の動きに従います。しかし、厳密には振られた棒が５㎝から数十㎝の間を移動するある瞬間に弾き始めなければなりません。ある人は10㎝移動した瞬間に、ある人は５㎝といった具合では出揃いません。指揮者は何㎝のところとは指示しません。しかし、演奏者の心はシンクロし合い、曲の出だしは一致していきます。指揮者と演奏者の心の繋がりは、常にリズムやテンポ、つまり時が共有されていなければ、その芸術性は高められません。

私たちの臨床において、**術者の手さばきとアシスタントの手さばきないし動きがシンクロしてくると、治療や手術はとてもスムーズに進み、よい結果も出せます**。何より時間の短縮に繋がり、患者の負担軽減に貢献できます。

こんなことを感じた経験はないでしょうか。ある日、あるいはある週の治療中、１時間に４、５人のランダムに入れられた大量の予約患者を診ていたとき、「今日は根治が多いな」、「今日は形成と印象だらけだな」、「抜歯が多いな」、あるいは「今週は義歯の調整ばかりだな」、というように、受付で処置ごとに予約のコントロールをしているわけでもないのに、同じ仕事が効率よく同じ時間帯に、同じ日に、あるいは同じ週にまとまって入り、アシスタントも受付も「今日はとてもスムーズに仕事をこなしているな」と感じる瞬間を。更に、このような治療内容がシンクロしていく状態が毎週のように連続してサイクル化して訪れるような体験。

逆に、患者の予約を１日に２人くらいに絞り込み、患者１人に３、４時間かけて一気に治療をするような場合や、外科、補綴担当、矯正をそれぞれ担当が分かれるチーム治療を同時に進める場合など、予定された全処置が予定時刻に不思議とぴったり終えるといった、論理的に説明はできないが、あまりにも予定

時刻どおり正確に終了するといった経験。これらはまさしく、歯科医療におけるシンクロニシティなのではないでしょうか。

無意識のうちにこのようなことを繰り返しているのは、**知識と技術と経験の積み重ねによって築き上げられていると思われた我々の臨床そのものが、実はシンクロニシティの連続して起こるフロー状態なのかもしれません**。なぜなら、患者一人ひとりの状態あるいは条件はすべて違うということが大前提なので、定刻に診療が終了することの論理的な説明はできないにもかかわらず、確実にこのような現象は常に体験できるからです。

患者の一番大切なもの、それは時間

私たちは、患者の来院時刻、すなわち治療開始時刻をお互いに意識し合います。患者は予約時間を過ぎてからの待合時間はとかく長く感じるものです。我々も約束を守ろうとしながらもつい１分、２分と過ぎてしまいます。せっかちな患者はそれを10分、20分も待たされたという印象を抱いてしまいます。

では、患者に診療が終わる時刻を約束してみてはいかがでしょうか。大規模な病院などでは診察が終わってから薬局で薬をもらって会計が終わり、病院を出られるまでに１時間以上かかるところもあります。そのような病院ほど、待ち時間中に掲示板に目が留まり、「患者様第一主義」などと架空の理念が掲げられたりしているものです。

臨床において、患者の時間を大切にすることは、診察終了予定時刻か少なくとも10分後以内に、その病院なり診療所を立ち去ることができるように自ら設定した終了予定時刻を正確に守り抜くことに尽きます。

本来、「治療計画」において、“計画”という言葉を使うため、治療終了時間あるいは時期を正確に設定する行為を伴うのは当然です。**時間概念なき治療計画は青写真に過ぎないと心得るべきです**。

チームアプローチやインターディシプリナリーアプローチのような複数の専門性をもつ技術を伴った処置を組み合わせ、１人の患者に長時間にわたる歯科医療を提供しようとする場合を考えてみます。例えば、“総治療予定時間が３時間で、まず主治医が不良補綴物を除去し、ディープスケーリングとプロビジョナルクラウンのための仮形成をして、歯と歯茎の条件を整えます。プロビジョナルを作製する間に歯内療法の担当医によって根管充塡が施され、その後、仮築造して完成したプロビジョナルクラウンを合着するとします。またその直後、矯正治療計画で予定されたマイクロインプラントの埋入を口腔外科担当医が施し、同日に矯正担当医が矯正装置を装着するといった総合治療計画に基づいて４名の歯科医師と２名の歯科衛生士が３時間の間に１人の患者にかかわって治療する”とします。歯科医師４名の専門各科の治療が順調に運んだ場合の予定治療時間がそれぞれはじき出されます。次にトラブルシューティング発生時の対処に必要な予備的な追加治療時間がはじき出されます。更に、各科において２つないし３つくらいは予備的対応時間を想定しておく必要があると思われます。

しかし、実際には一切トラブルシューティングがない場合と想定していたそれらがすべて発生した場合では、大変な時間差が発生し

The Choice　天然の抗生物質といわれるグレープフルーツシード

真夏の洗面所で水に浸けられたリテーナーやスプリント。装着する寝る前になるとヌルっとする口腔内細菌の繁殖は大変不快なものです。洗口剤を数滴入れても、24時間も経てばやはりヌメリが出てきてしまいます。

ある夏、スプリントを浸けた水にグレープフルーツの種から抽出されたフラボノイドが入ったGSE(Grapefruit Seed Extract)を2、3滴入れてそのまま旅行に出かけました。10日後にスプリントを取り上げてみると、何とヌメリが全くなかったのです。

この驚きがきっかけで神奈川歯科大学細菌学教室に検証を依頼したところ、日常的に歯科で口腔内に使う消毒薬に比べて卓越した効果があると傍証されました[1)]。検証にはGSE®、LISTERIN®、GUM®、Isodine®、そしてHALIZON®の4種の洗口剤を比較試験しました。細菌の発育阻止効果が顕著であったのはGSE®(600倍希釈)とGUM®でしたが、使用規定の許容最大希釈倍率の400倍希釈液であればGUM®よりもはるかに高い抗菌効果があるとわかりました。また、抗菌効果の経時的変化を比較しても、口腔内細菌の増殖を最も長時間にわたって抑制すると判明しました。

口腔内細菌の増殖抑制に効果があるだけではなく、外来性の病原細菌に対しても抗菌効果を示すことから、抜歯や歯周外科治療の創傷部位に対する消毒薬としても使用できます。以後、洗口剤としてだけではなく、手術前の消毒や歯周病患者のクリーニング、出血を伴う恐れのあるSRPの処置前後に必ず使用しています。

口腔内での使用は許容最大希釈倍率の400倍希釈液までですが、リテーナーやスプリント、あるいは義歯の口腔外での使用であればもう少し濃度を上げることにより、夏の10日間でも細菌増殖抑制効果は持続していたということです。

■グレープフルーツシードエキス「GSE」
製造：Nutri Biotic 社
販売：メラトニン USA ドットコム
http://www.melatoninusa.com/

【参考文献】
1）浜田信城, 中原悦夫, 他：口腔細菌に対するグレープフルーツ種子抽出液の抗菌効果. 神奈川歯学, 38(4)：148-153, 2003.

てしまいます。想定された対処にかかるすべての時間を用意すれば、実に効率性を欠いた予定表になってしまいます。また、実際に遭遇するトラブルシューティングの組み合わせも数え切れない場合があるのです。

現実的にはこのような**不確定状態にありながら、人間には無意識のうちに予定時間内に正確に診療を終了させ得る能力がある**と言わざるを得ません。

●

患者にとって医療機関に行くのは非日常的行為です。ヘルスプロモーション、予防、アンチエイジングなどの**創造的歯科医療は、“患者の日常的行為の枠のなかに参入する”こと**です。従って、患者のスケジュールの“始まりと終わりがセットになった医療行為”として進化していくということなのです。

「相手があることだから」、「人体を扱う仕事だから」と、終了時刻を確約できないと言い放つことは簡単です。しかし、常に時間を意識し、処置や技にリズムやテンポを取り入れる習慣を身につけていくと、肉体的には体内時計とシンクロしてくるのか、あるいは精神的にはシンクロニシティが訪れるのかは不明ですが、**“患者の一番大切なものは命、すなわち時間である”ことを意識した瞬間に、不可能を可能にする天使が舞い降りてくる**ことを信じてみてはいかがでしょうか。